

令和 4 年 5 月 8 日現在

機関番号：34507

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00780

研究課題名（和文）小学校における語彙・文法の定着を図るためのフィンランド型の言語活動の教材の開発

研究課題名（英文）The development of Finnish-style language learning activities for the building English vocabulary and grammar for Japanese primary school students

研究代表者

米崎 里 (Yonezaki, Michi)

甲南女子大学・国際学部・准教授

研究者番号：60737352

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：外国語教育が成果を上げていると言われているフィンランドの小学校英語教科書を分析し、日本の小学校児童の実態に合わせて、フィンランド型のプラクティスを考案し、ワークブックとして冊子にまとめた。ワークブックには、1)書く活動を含めて児童が学習した語彙や文法を定着させるための多種多様な語彙・文法に関するプラクティス、2)多様な学習者を考慮したプラクティス、3)語彙と文法を組織的に結びつけたプラクティス、4)学習する語彙や文法を支えるチャンツ・文法表を含んだ。そしてこれらのフィンランド型プラクティスを用いて、研究協力校にて授業を行ってもらい、児童の英語力の推移の検証を行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果の学術的意義や社会的意義として2点ある。1点目は、日本の小学校英語環境や児童の実態に合わせてフィンランド型のプラクティスのモデルを示し、教材（ワークブック）として学校現場に提供することができたことである。英語の専科教員でない学級担任にも教材を使って授業を行ってもらい、それが可能であることを示した。そして2点目は、フィンランド型プラクティスを用いた授業を行なった結果、児童からは好意的な反応を得ることができ、かつ児童の英語パフォーマンスに効果があったことを実証できたことである。

研究成果の概要（英文）：The present study focused on English textbooks used in Finnish schools where English language education is very successful and aimed to develop and adapt these Finnish-type practices for Japanese primary school pupils. Based on the results of the analysis of Finnish textbooks, our developed practices include 1) various types of vocabulary and grammar practices including writing so that pupils can understand and acquire them, 2) practices explored for a wide range of learners, 3) vocabularies and grammar practices which are systematically linked, 4) chants (or songs) and grammar tables. This study also examined whether these Finnish-type practices would be effective for Japanese primary school pupils.

研究分野：英語教育学

キーワード：フィンランド型プラクティス 小学校英語 英語ワークブック 教材開発

1. 研究開始当初の背景

2017年（平成29年）3月に告示された学習指導要領によって、2020年（令和2年）から小学校高学年において外国語（英語）が教科化されることが決定された。本研究が開始したのは2019年（令和元年）4月で、この時期は小学校英語教育の全面実施1年前となる移行措置の期間であった。教科としての英語の授業を、原則として学級担任が指導することが決定され、学校現場の教員からは英語を教えることへの不安の声も多く聞かれる中、英語授業が開始された。

一方、フィンランドの外国語教育は学校教育において多大な成果を上げており、その成功要因の一つに、教科書が挙げられている（米崎・伊東, 2010; 伊東・高田・松沢・緑川, 2015）。フィンランドでは小学校から文法が教えられており、教科書には文法や語彙に関する多種多様で手厚い言語活動が含まれている。フィンランドでは英語専科の教員あるいは英語を教える資格がある担任が小学校の英語を教えているが、このような英語専門の教員でさえ、教科書の中で手厚い言語活動が提供されている。一方、日本の教科書は検定教科書制度が設けられているため、ページ数の制限があることが大きな要因であると考えられるが、新たな学習項目を次々に習わなければならない、様々な文脈を意識的に使用する経験を重ねる言語活動が少ないこと、定着を図る手立てが見られないことがこれまで教科書の課題として指摘されてきた。日本の小学校の教員にこそ、フィンランドのような教科書が提供しているような手厚い言語活動（本研究では以降プラクティスとする）を提供しないとイケないのではないだろうかと考え、本研究を開始することになった。

2. 研究の目的

本研究では、日本の小学校英語教科化後を見据えて、小学校における学習項目の定着を図るために、フィンランドの小学校教科書で提供されているようなプラクティスを開発し、その教材開発を行うことである。次の3点が主な研究目的である。

- (1) フィンランドの小学校英語教科書にはどのような種類のプラクティスがどれくらい提供されており、児童の英語コミュニケーション能力が育成されているのか分析を行う。
- (2) 日本の小学校英語の環境や児童の実態に合わせて、フィンランド型プラクティスを考案し、教材を開発する。
- (3) 日本の小学校英語教育において、フィンランド型プラクティスを用いた英語授業を実践し、児童の英語力の推移を検証する。

3. 研究の方法

上記の研究の目的を達成するための研究の方法として、以下の方法で研究を推進していった。

(1)の研究目的においては、フィンランドの小学校英語教科書に掲載されているプラクティスの量的・質的分析を行った。また教科書のプラクティスが、実際フィンランドの教室ではどのように使われ授業が展開されているのか現地訪問・授業観察を行った。

(2)の研究目的においては、日本の検定教科書で学ぶ言語材料を分析し、また児童や英語学習環境に合わせて、フィンランド型プラクティスを作成し、教材開発を行った。研究協力校にて試験的に教材を使ってもらい、児童、教員の反応を見ながら教材の修正を行った。

(3)の研究目的においては、開発した教材を冊子にまとめ研究協力校に配布した。また研究協力校にて、一定期間において英語授業を実践し、児童の英語力の推移の分析を行なった。

なお、研究成果を関連学会で発表するとともに、勤務大学で実施している公開講座や研修講座、論文投稿の形で、日本の英語教育に対しての研究成果の還元を努めた。

4. 研究成果

(1) フィンランドの小学校英語教科書分析

分析対象の教科書は、フィンランドで広く使用されている Sanoma Pro 社の *Yippee!* 3-6年生を分析した。フィンランドの小学校では日本の中学校にあたる文法項目を教えているため、本研究では、学校種は違うが、プラクティス量を比較するために、日本の中学校検定教科書（平成28年度版・中学校1年-3年）1社を取り上げ同様に分析した。分析の結果、フィンランドの教科書には、1) 質的・量的に豊富なプラクティス、2) 学年内・学年間で反復して学べるプラクティス、3) 語彙・文法が組織的に結びつけられたプラクティスが提供されていることを明確にした。

1) 質的・量的に豊富なプラクティス

フィンランドと日本の教科書の構成要素とその数（各プラクティスは大問数を算出）を分析した結果、表1が示すように、フィンランドの教科書には、圧倒的な量のプラクティスが掲載されている。特に日本の教科書には皆無であった語彙に関するプラクティスが重きが置かれており、文法を支えるためのプラクティスとして提供されていることが特筆される。

さらに文法プラクティスに関して小問数を算出し比較してみると、図1が示すようにフィンランドの教科書には、日本の教科書と比較しておよそ5倍のプラクティスが含まれており、文法に関するプラクティスが大量に提供されていることが分かる。フィンランドでは英語初期段階でまず、言語形式を重視したプラクティス与えて、文法の定着を目指していることが読み取れる。

表1 教科書の構成要素

項目	フィンランド		日本	
	数	%	数	%
文法プラクティス	1,027	48.6%	401	47.4%
語彙プラクティス	561	26.6%	0	0%
発音プラクティス	101	4.8%	82	9.7%
本文内容理解に関するプラクティス	182	5.0%	191	22.6%
歌・チャンツ	105	5.0%	5	0.6%
ターゲットセンテンスの表示・文法表	113	5.3%	113	13.3%
その他	23	1.1%	54	6.4%
計	2,112	100%	846	100%

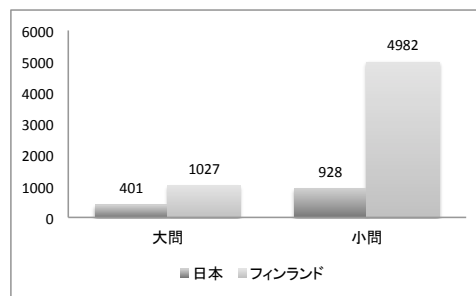


図1 文法プラクティスの数比較

一方、フィンランドの教科書には質的にも豊富なプラクティスが含まれており、言語形式を重視したプラクティスでも児童が楽しみながら学べるプラクティスとなるよう工夫がなされていた。絵と単語を結びつけるだけのプラクティスや、正しい英文を選ぶだけのプラクティス、また語彙に関するプラクティスはそのまますべてを書かせるのではなく、一文字だけ書かせたり、文字の並べ替えをさせるだけのプラクティスなど、比較的取り組みやすくどの学習者もできるように工夫がなされていた。一方、プラクティスの中には、レベルの高い活動が自由選択として提供されていたり、学習者自身が自分のレベルに応じて解答できるプラクティスが多く見られ、多種多様なプラクティスを提供することにより、結果として多様な学習者に対応ができていた。

2) 学年内・学年間で反復して学べるプラクティス

フィンランドの教科書には、各学年3~4ユニットの学習が終われば、これまで学習した語彙や文法の復習を行うことができるプラクティスが提供されている。また学年をまたぎ繰り返して文法項目を学習できる仕組みになっている。たとえば、小学校3年生でbe動詞現在形が教えられており、小学校4年生、5年生でもbe動詞現在形が再び取りあげられ復習できるようになっている。またbe動詞、一般動詞haveの比較の練習は学年をまたぎ強調されており、小学校3年生、4年生では幾度となく教えられている。これは語彙に関しても同じで、重要語彙は学年をまたぎ繰り返して学べるようになっている。つまり、学年内・学年間でスパイラルに復習できるプラクティスが提供されているのである。

3) 語彙・文法が組織的に結びつけられたプラクティス

フィンランドの教科書は、各ユニットにより多少異なるが、各ユニットのプラクティスのおよその展開を示すと、図2のようになる。各ユニットには学習する文法項目に使われやすい語彙が選定されており、その語彙を用いて文法プラクティスを行い、最後は統合的な活動型のプラクティスにつなげている。また学習した語彙や文法を使ったチャンツ・歌や文法表も定着に役立っている。

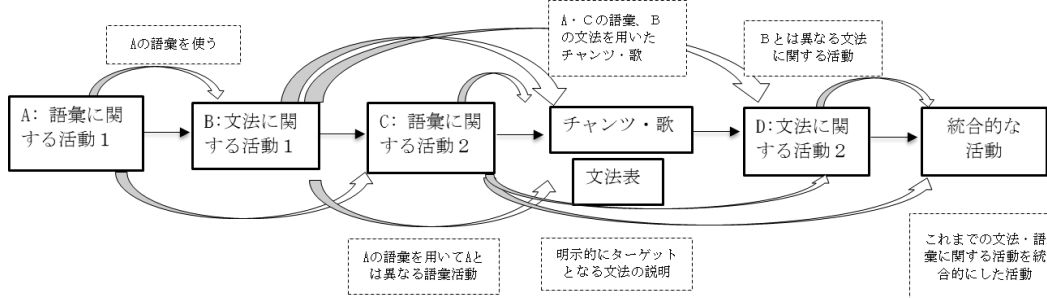


図2 各ユニットの活動の展開

(2) フィンランド型プラクティスの開発

フィンランドの教科書分析を終えて、日本の英語学習環境や児童の実態に合わせて、フィンランド型プラクティスの開発を試みた。本研究のフィンランド型プラクティスの主な特徴を以下に示す。

1) 小学校検定教科書に準じた言語材料の配列

各出版社によって言語材料の配列は多少異なるが、小学校高学年で扱う言語材料に関するプラクティスを考案した。ただし、検定教科書では扱っていないが、学習が必要だと思われる語彙や表現は若干追加している。

2) イラストで理解し、ゲーム感覚で行えるプラクティス

児童が無理なく楽しみながらプラクティスを行うために、イラストをふんだんに使いイラストを通して語彙や表現を理解できるようにしたり、また児童が半ばゲーム感覚でプラクティスを取り組めるようなプラクティスの作成を試みた。

3) 繰り返して触れ、使いながら学ぶプラクティス

フィンランドの教科書のプラクティスは、各ユニットには多彩な使うことを目的としたプラクティスが提供されており、プラクティスを通して語彙や文法項目を定着することが目指され

ている。本研究で作成したプラクティスにおいても、さまざまなプラクティスを通して繰り返して触れ、使いながら定着することを目指した。またプラクティスだけでなく、文法項目をターゲットセンテンスの形で明示的に示し、学習する語彙や文法項目を取り入れたチャンツや歌も提供し、プラクティスをサポートした。

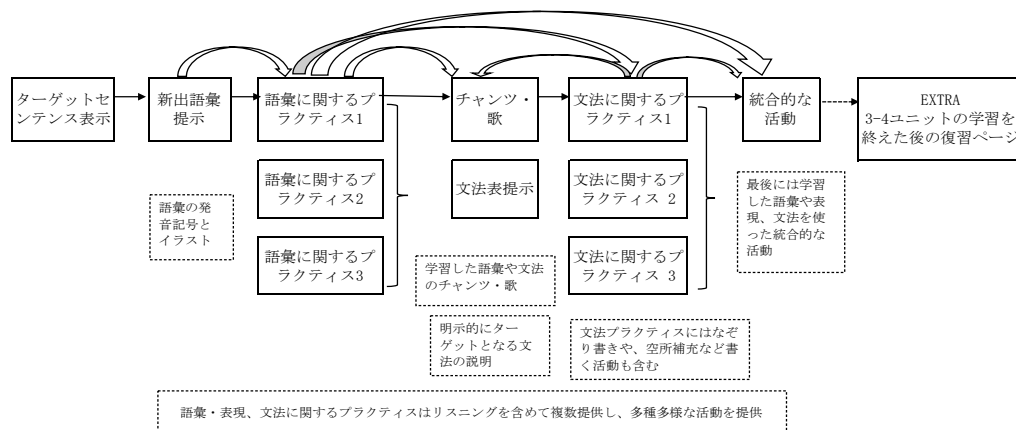


図3 各ユニットのプラクティスの展開

各ユニットの展開は、図3にあるようにまず語彙に関するプラクティスを行い、続いて文法に関するプラクティスを行う。そしてユニットの最後には、学習した語彙や文法項目を活用した統合的な言語活動型のプラクティスにつなげるようにしている。さらにいくつかの学習を終えた後に Extra と呼ばれるページを設け、これまで学習した語彙や文法項目を復習できるプラクティスを提供し、ユニット内、ユニット間で繰り返して既習語彙や文法項目を学べるよう試みた。

4) アウトプットを支援するためのプラクティスの使用

開発したプラクティスには、意味と形式を重視したプラクティス、いわゆるドリル的なプラクティスも含めた。ドリル的なプラクティスは、教師主導になりやすく、学習者の活動が受け身になりやすい等の理由で批判もあるが、一方でそのようなプラクティスは、言語形式や機能を結びつける役割を果たし、次のコミュニケーション活動の橋渡しとして必要なプラクティスであるとされている（例えば Carlson, 1997; 高島, 2011; Van den Branden, 1997）。本研究でもこのようなドリル的なプラクティスを積極的に取り入れた。ただしドリル的なプラクティスにおいては、児童が楽しんで行えるようなゲーム的要素を取り入れるなど工夫を加えた。

(3) フィンランド型プラクティスを用いた授業実践

開発したプラクティスはワークブックとして冊子にまとめ、研究協力校に配布した。そして6年生を対象に約2ヶ月間、週2時間の英語授業や早朝学習（1限目が始まる前15分間の学習時間）の中で、ワークブックを用いて英語の学習を行なった。そのうち研究代表者が4回の授業を行い、残りはそれぞれの学級担任に行ってもらった。

児童の英語力の推移を調査するため、当初スピーキングによる事前・事後テストを実施する予定であったが、コロナ禍で発話の制限があったためライティングによる事前テスト・事後テストに変更した。テストの内容は、日本語がまだできないが英語ができる外国からやってきた転校生に、英語で自己紹介をしたり、相手にいろいろたずねてみようという内容である。なお、英語の単語がわからなければカタカナで書いてもよいという指示を与えた。

1) 使用言語表記、使用総語数の平均値の変化

事前・事後テストの比較分析から、事後テストではライティングにおける児童の英語表記の割合が増え、カタカナやローマ字表記の割合が減る結果となった（表2）。また事前テストの使用総語数の1人あたりの平均値は15.46語であり、事後テストでは22.50語に増加し、統計的に有意な差があった（ $t(102) = -7.18, p < .01, r = .58$ ）。ライティングで産出された英文の総数が増え、児童1人当たりの使用総語数が有意に増加する結果となった。

2) 使用された単語の種類と使用英語表現のパターンの比較

事前・事後テストにおける児童が使用した単語の種類、英語の表現ともに、事後テストで大幅に増加する結果となった。表3は事前・事後テストで児童が使用した単語の種類数の比較であり、表4は事前・事後テストで使用した英語表現のパターンとその数を示している。

表2 英文の産出数と使用言語比較（ $n = 103$ ）

	事前テスト		事後テスト	
	英文数	%	英文数	%
①英語	228	50.7	440	68.1
②カタカナ	107	23.8	46	7.1
③ローマ字	21	4.7	7	1.1
④混合型	94	20.9	153	23.7
	450	100.0	646	100.0

表3 事前・事後テストで使用された単語の種類数

	疑問詞	動詞	名詞・代名詞	形容詞	副詞	冠詞	前置詞	助動詞	その他
事前テスト	4	16	88	14	4	3	5	0	5
事後テスト	3	30	124	16	9	3	7	2	9

表4 事前・事後テストで使用された英語表現のパターンとその数

	英語表現	事前テスト	事後テスト		英語表現	事前テスト	事後テスト
	I'm 名詞	27	42		I don't +動詞+ 名詞	2	10
	I am (I'm) + 形容詞.	4	1		否 I can't 動詞	0	7
	I am (I'm) + 前置詞+名詞.	4	1		定 No, I can't 動詞	0	1
	I am (I'm) + 前置詞+名詞 +前置詞+名詞	0	1		文 No, I'm not from 名詞.	0	1
	I'm good at 動名詞 / 名詞	2	6		No, I'm not.	0	1
	名詞+is 形容詞	1	1		Are you + 名詞?	1	0
	You are + 名詞	0	1		Are you 前置詞 + 名詞?	1	1
	名詞 + is+名詞	120	115		Can you 動詞?	0	19
	I'm going to + 名詞	0	1		Do you like 名詞・動名詞?	6	46
	I can + 動詞	4	21		Do you want to 動詞?	0	1
	I + 動詞 (現在形)	0	1		Do you 動詞 (+ 名詞) ?	0	26
肯定文	I'll + 動詞	0	1		How about you?	0	1
	I + 動詞+名詞	77	111		How are you?	5	3
	I + 動詞+動名詞	6	6		How many 名詞 do you have?	0	1
	I want to 動詞	0	1	疑問	How old are you?	1	2
	I + 動詞 at 時間	0	1	文	What day is it today?	0	2
	I + 動詞 +前置詞+名詞	6	7		What do you 動詞 (+ 名詞) ?	16	16
	I 動詞 (過去形)	3	3		What is 主語?	2	2
	Have a nice day.	0	2		What time do you 動詞?	0	1
	Nice to meet you.	15	21		What time is it (now)?	0	2
	See you.	1	1		What 名詞 do you like?	7	18
Thank you (for ~) .	0	18		What 名詞 can you 動詞?	0	1	
Yes, I am.	0	1		What's your 名詞?	34	37	
Yes, I do.	0	1		When is 主語?	0	11	
				Where are you from?	26	17	
				Where do you 動詞?	0	2	
				合計	371	594	
				種類	24	49	

短期間にもかかわらず児童が使用した単語の種類や英語表現のパターンの種類が増えた理由として、これまでの学習内容の積み重ねに加え、既習語彙や表現を定着するために様々なプラクティスを積み重ねることにより、児童は学習した語彙や表現の一部を入れ替えて運用できるようになったと推察される。

(4)まとめ

以上、本研究では、フィンランドの小学校英語教科書分析から始まり、日本の小学校英語の学習項目の定着を図るためのフィンランド型のプラクティスの開発、そしてその検証を展開してきた。本研究の成果の学術・社会的意義として3点挙げられる。1点目は、日本の小学校英語環境や児童の実態に合わせてフィンランド型のプラクティスのモデルを示し、教材(ワークブック)として学校現場に提供することができたことである。何度も繰り返し定着を図るプラクティスだけでなく、特定の学習項目を様々な現実味のあるコンテキストの中で、児童が楽しく取り組めるよう工夫しながら意識的に使用する経験を持たせるプラクティスの作成を試みた。2点目は、英語の専科教員でない学級担任も対応できるプラクティスを提供できたことである。そして3点目は、フィンランド型プラクティスを用いた授業を行なった結果、児童からは好意的な反応を得ることができ、かつ児童の英語パフォーマンスの効果も確認できたことである。

日本では小学校英語の開始学年の低学年化が今後議論されることが予想される。フィンランドでは1970年代からすでに教科としての小学校英語が開始されており、これからもフィンランドの英語教育から多くのことが学べそうである。

引用文献

- Carlson, R. A. (1997) *Experienced cognition*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- 伊東治己・高田智子・松沢伸二・緑川日出子 (2015) 「Autonomy 育成の観点からのフィンランド英語教科書分析」『日本教科教育学会誌』第38巻2号, 23-36.
- 高島英幸 (2011) 『英語文法導入のための「フォーカス・オン・フォーム」アプローチ』東京: 大修館書店.
- Van den Branden, K. (1997) Effects of negotiation on language learners' output. *Language Learning*, 47(4), 589-636.
- 米崎里・伊東治己 (2010) 「フィンランドの小学校の英語教科書分析—Autonomy の視点から—」『小学校英語教育学会紀要』第10号, 37-42.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 米崎里・川見和子	4. 巻 43巻2号
2. 論文標題 フィンランドの小学校英語教科書におけるブラクティス分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本教科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 35-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18993/ jcrda jp.43.2_35	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 米崎里	4. 巻 57
2. 論文標題 小学校英語における語彙・文法の定着を図るためのフィンランド型ブラクティスの開発とその実践報告	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 甲南女子大学研究紀要 I	6. 最初と最後の頁 85-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 米崎里・米崎啓和	4. 巻 50
2. 論文標題 フィンランドと日本の小学校英語教科書におけるType-Token Ratioの比較分析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 259-264
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 米崎里、川見 和子	4. 巻 49
2. 論文標題 フィンランドの英語教科書における本文内容理解を促進するためのブラクティス分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 349～354
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20713/celes.49.0_349	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 米崎里・松岡達也・米崎啓和	4. 巻 51
2. 論文標題 小学校英語におけるリテリングの活用と効果	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 157-164
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 米崎里・川見和子
2. 発表標題 「フィンランドの英語教科書における本文内容理解を促進するためのプラクティス分析」
3. 学会等名 全国英語教育学会第45回弘前研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 米崎里・川見和子
2. 発表標題 「フィンランド型英語プラクティスのモデル提示の試みー小学校英語教科化見据えてー」
3. 学会等名 第19回小学校英語教育学会北海道大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 米崎里・松岡達也・米崎啓和
2. 発表標題 小学校英語授業におけるリテリングの活用と効果
3. 学会等名 中部地区英語教育学会第50回記念愛知大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 米崎里
2. 発表標題 フィンランド型英語プラクティスの開発とその実証報告
3. 学会等名 全国英語教育学会第46回長野研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 米崎里
2. 発表標題 自律した学習者をどう育成するかー家庭学習、学習方略、自己調整
3. 学会等名 英語授業研究学会第32回全国大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 米崎里	4. 発行年 2020年
2. 出版社 亜紀書房	5. 総ページ数 230
3. 書名 『フィンランド人はなぜ「学校教育」だけで英語が話せるのか』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究で開発したフィンランド型プラクティスをまとめ、ワークブックとして冊子にした。
 米崎里・岩崎幸子・川見和子「英語ワークブックI」 2021年4月発行
 米崎里・岩崎幸子・川見和子「英語ワークブックII」 2022年4月発行

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	多良 静也 (Tara Shizuya) (00294819)	高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・教授 (16401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関